

祀られる死と抹消される死

西谷 修
にしに おさむ

西洋の暦による時の流れが新しい世紀の敷居をまたぐ頃、近い将来を展望してあちこちで「生命科学の世紀」といった標語が飛び交った。遺伝子研究や医療テクノロジーの長足の進歩が、科学による生命現象の全面的な解明や、生命の自在な操作という見果てぬ夢を見せていた。だが、新しい世紀の朝のまどろみは、日常生活の足となった民間航空機が、カッターナイフひとつで乗っ取られて、繁栄を象徴するニューヨークの巨大ビルに突入するという、前代未聞の事件によって一挙に破られた。それ以降、「文明世界」の人間は見えない死に脅やかされ、その死の危険を予め排除するためとして、膨大な破壊力で死の元凶を追放しようとしている。だが、「文明世界」から死を遠ざけようとするその意志は、そのこと自体が「文明の外」に引き起こすはるかに多くの死を、同時にその視界から抹消しようとしている。

九・一一という事件はいろいろな意味で世界に重大な変化をもたらした。日本で「同時多発テロ」と呼ばれるこの事件は、何よりもまずアメリカにこれまで経験したことのない恐怖（テロ

ル）をもたらした。世界戦争の時代にも一度も爆撃を受けたことがなく、つねに海を越えた他国の戦場で戦い、その圧倒的な軍事力が他を圧してきたアメリカが、初めて衝撃的な攻撃を受けたのである。「安全」神話が崩れ落ちたと言われた。大西洋と太平洋という二つの大洋によって世界の「戦場」から隔てられ、迎撃ミサイル網によって保護されたはずのアメリカで、ニューヨークに聳える双子のビルが、一瞬のうちに壮大な廃墟と化したのである。そして三〇〇〇人近い犠牲者が出た。

だが「九・一一」という事件は、それ自体がいったいどういう出来事だったのか、まったく明らかにされないまま、さまざまな局面で世界に重大な変化をもたらすことになった。事件の背景は明らかにならない。アメリカ政府は明らかにしようとしめない。ただ、「犯人」を名指し、公表できない証拠とやらを同盟国の一部に伝えただけで、ただちに「報復」の軍事行動に出た。

これによって何が変わったのか。

明らかに変わったのは戦争に関する考え方、あるいは戦争のあり方である。戦争は悪であって避けるべきだという二〇世紀の常識は一挙に過去のものとなれ、敵が「テロリスト」なら、どんな強引な爆撃も、問答無用の先制攻撃も「正義の戦争」だということになり、「正義」である以上これにはみんなが参加すべきだ、という主張までなされることになった。実際、九・一一以後アメリカ政府が主張した「テロとの戦い」は、曲がりなりにも世界の主要国に認知さ